

中小企業にとっての産学連携を探る
第2回「産学連携オープンセミナー」開催中小企業にとっての産学連携を探る
第2回「産学連携オープンセミナー」開催

KVBCでは、大学の当事者をお招きして、産学連携の現状や可能性などについてお伺いする「産学連携オープンセミナー」を開催しています。去る11月4日に行われた第2回セミナーでは、京都造形芸術大学の藤井秀雪教授をお迎えし、文系大学から見た産学連携のあり方や意義、目的などについて幅広く語っていただきました。



藤井秀雪（ふじいひでゆき）氏

1943年、京都市生まれ。1962年、(株)七彩工芸（現七彩）に入社後、広報宣伝、商品企画開発などを担当。現在は、京都造形芸術大学教授、空間演出デザイン研究センター主任研究員。京都の伝統産業及び他府県産地の技術を生かした、新用途とデザインによるモノづくりを産官学連携により推進している。

ヒトとモノを結びつける
人間を軸に据えた“デザイン”

日本の工業社会において、これまで“感性”というのはあまり問題にされませんでした。21世紀を迎えた今、人間を軸に据えたモノの見方、考え方、感じ方が求められるようになってきました。例えば、「この衣服、自分も着てみたいな」と思わせる要素、それは単に衣服の機能性や合理性だけではなく、大切なのは、ヒトとモノ（場）をつなぐ要素、つまり“デザイン”です。しかも、見た目だけの面白さ、刺激だけではなく、人間に対してどのような意味を持っているのかということについて、多くの人たちに共感を得られるようなものでなければ、新しいモノづくりは発想できないと思います。

既存概念にとらわれない新しい発想、それは「視点を移動させること」と「視点を融合させること」です。現代社会の縦割りの仕組みでは、1つの視点にこだわっているのはモノづくりを完結することはできないでしょう。異業種・新技術に視点を転移させ、さらに融合させることによって、これまでにないユニークな課題や問題が見えてくるのです。

京都造形芸術大学では、社会の急激な変化に対応できる柔軟な発想力を持った人材を育成するために、芸術的な視点からさまざまな産官学連携を進めています。パッケージデザインや商品の新用途開発、企業広告や広報アイテムの制作のほか、文化財保護や修復、造園・庭園計画など、京都ならではの非常に多面的な研究に取り組んでいるのが特徴といえるでしょう。

伝統産業に若い発想をプラスして新商品を開発

私たちが展開している産官学連携の具体的な事例ですが、昨年、京都の風呂敷メーカーと共同で取り組んだ「風呂敷の用途開発とデザイン」があります。まず最初に、企業の社長から「風呂敷の歴史と用途」や「今回のプロジェクトへの期待」などについて熱っぽく語ってもらい、学生たちに産学連携の意義、目的をしっかりと理解してもらったうえで、さまざまな演習プラン、モックアップ、プレゼンテーションなどを重ねました。今年2月、新風館で開催された「結ぶ・包む」展に出品しましたが、例えば風呂敷を使った帽子やティッシュ入れ、メガネケースなど、固定概念にとらわれない非常にユニークな作品がいくつも生まれました。このうちの3点は実際に商品化されています。

もう一つ、西陣の組みひもメーカーと連携して、組みひものさまざまな可能性について学生たちと検討を重ねました。風呂敷のときと同じように、最初に工場見学を実施して、現場の職人さんたちがどのような思いで組みひもを作っているのか、まずは組みひも1本に込められた意味を理解することから始めました。こちらのほうも、吊り革やランプシェード、アルコールランプといった若い感性がきらりと光る面白い作品がたくさん生まれ、今年度はさらに新しい用途開発やデザインを目指して頑張っているところです。

現代社会に新しい付加価値を生み出す
“新”伝統産業

和歌山県の高野山のふもとに、高野口というパイル織・編みの産地があります。新幹線や航空機などの座席シートの素材を作っていますが、最近は生産主体が中国に移ってしまい、厳しいコスト競争を強いられています。昨年、経済産業省の関連団体である中小企業総合研究機構から、「若い学生の感性を生かして、産地の人たちを元気づけてほしい」という要望があり、学生50人を引き連れて高野口まで見学に出かけました。そのとき、産地の皆さんが、「君たちの斬新な発想に期待しているよ」「ぜひ僕たちと一緒に頑張ろう」と励ましてくれました。今までは、自分の殻に閉じこもって、一歩も外に出ないという職人さんが多かったのですが、若いエネルギーと接することで、自分たちの商品や技術に自信を持てるようになったようです。学生とのコラボレーションによって、これまでにいくつかユニークな作品も生まれており、非常に高い評価を受けています。

そのほかにも、文部科学省オープンリサーチセンター事業の1つとして、“生活の芸術化”に関する比較文化史的研究を行っています。例えば、京都の町家でのどのような暮らしが営まれているのか、そのライフスタイルを調査し、そこから現代の生活に適合化できる新しいモノづくりを模索していきたいと思っています。

さて、京都は“伝統”が息づくまちですが、私は「伝統工芸」と「伝統産業」は明確に区別して考えなければならぬと思っています。伝統工芸というのは、高い技術をもつ匠が作り上げた、いわば一品作の美しさが魅力です。その一方で、伝統産業というのは、京都の質の高い生活文化を支えてきた1つの仕組みなのです。しかし、それがいかに美しく、優れたものであっても、現実の生活に受け入れられるデザイン、スタイルでなければ、現代社会に継承されるはずがありません。伝統というのは、決して過去の存在ではなく、新しい“質”“価値”を創造する産業システムであると確信しています。これからも芸術系大学ならではの知的集積、ノウハウを生かしながら、21世紀を支える新しい伝統を生み出し、継承できる人材育成に力を注いでいきたいと思っています。



第2回KVBCオープンセミナー 参加者アンケート結果

(1) 本日のセミナーはいかがでしたか？

大変良かった・・・44% 良かった・・・39% 普通・・・17%

(2) 具体的に良かった点

- 具体的な話をかみ砕いて説明してもらったので、非常に分かりやすかった。
- 人と社会に役立つデザインへの必要性を強く感じる事ができた。
- 大学の正規授業で産学連携に取り組んでいるのが興味深かった。
- 質疑応答の時間がきっちりととられ、活発な意見交換ができた。
- コーディネーターの司会進行がスムーズだった。

(3) 改善すべき点

- 産学連携で開発された商品が実際にかいじょうにあれば、もっとわかりやすかった。
- リエゾンオフィスの体制について、具体的な説明を聞きたかった。
- これまでの産学連携セミナーの内容と比較できる資料があれば、他大学との違いが分かるのでは。

□

□

□